甲子園研修を終えて

下高井農林高等学校　野球部監督　宮嵜平

今回の研修に参加するにあたり、幼少期から甲子園に憧れ続け教員・指導者を目指した自分に立ち返り、とても楽しみでワクワクしながら参加しました。甲子園へは私的にも公的にも何度か訪れていましたが、今回は観客としてではなく研修生として「勉強」することができました。その中での感想や考えを報告させていただきます。

〇甲子園は温かいところ

8 月 9 日の正午過ぎに現着し、ちょうど長野県代表である飯山高校の試合を後半から見ることができました。結果はご存知のとおり大差がついてしまいましたが、そんな中でも一生懸命にプレーする飯山ナイン、声を張り続ける吉池監督と木村部長の姿に超満員の観客の心が動かされ、温かい声援がとても印象的でした。地方球場ではヤジや罵声などを時折聞くことがありますが、今回の甲子園では聞くこと、むしろ声援にあふれていました。試合を通じて、甲子園で勝つことは大変なことだと感じるとともに観衆の力も大きな戦力になると肌で感じました。

また、甲子園の試合時間は 2 時間以内とよく聞きますが、その理由の一つに暑さがあると気づきました。スタンドに座っているだけで全身汗だくになる暑さの中、2 時間以上もの活動は危険で、選手だけではなく審判の方々も暑さから守るために 2 時間以内の試合を目指していると感じました。加えて、暑さから選手を守るために、冷風機や給水器、ミスト冷風機などがベンチ内やベンチ裏、室内練習場に設置されており、テレビでは見ることのできない工夫がありました。試合後の取材も 23 分限定で長時間の取材から選手を守り、クーリングダウンも念入りに行っていました。試合後 1 時間でバスへ乗り宿舎へ帰るのも選手の負担を最大限減らし、守るということではないでしょうか。

〇甲子園でのプレー

試合見学をして見て、一番に感じた事は全力プレーでした。全力という言葉にはとらえ方が様々あるかと思いますが、私が感じたのは、持っている力を出し切る全力でした。ピッチャーは練習を積み重ね磨いてきたボールをバッターへ思い切り投げ、バッターはそれに応えようとフルスイングしていました。変化球でかわすタイプのピッチャーももちろんいましたが、そのスタイルを貫いて正面からバッターに向かっていく姿勢が見られました。球数制限や酷暑など様々な指摘が飛び交っていますが、選手たちはそんなもの関係なく自分の持っている力を最大限発揮しようとプレーしていました。「打ってみろ」とピッチャーが投げ、「打ってやる」とバッターが応える。これが野球の原点でもあり、人々を感動させ、応援させるのではないでしょうか。

〇甲子園期間での過ごし方

今回、県代表と同じ宿舎に泊めさせていただいて、一番気になったのが食事です。正直、味が合わなかったです。飯山高校は１０連泊したと聞きましたが、ホームシックになる事はもちろん、不慣れな土地、気候、食事に適応することもまた必要になってくると思います。また、練習時間は２時間となっていますが、割り当てられた会場までのバス移動など考えると意外と時間がかかりそうでした。余暇の時間も含めての甲子園期間だと思うので時間の過ごし方も勉強になりました。

〇キャッチボールは練習

甲子園は試合終了後３０分で次試合が開始され、スピード感のある大会なのは有名ですが、ここまで早いのかと感じたことがあります。地方大会の試合前は外野でキャッチボールをしますが、甲子園はベンチ前で数分のキャッチボールですぐにシートノックに入ります。室内練習場も見学しましたが、ブルペンが２～３カ所あるだけで、１８名が一斉にキャッチボールはできず、遠投なんてシートノック内まで間違いなくできません。球場入り前にアップをしているのかまで確認することはできませんでしたが、球場に入ってからは２０ｍ以内のキャッチボールで肩をつくるしかありません。事前からその距離で肩をつくるのも甲子園対策になるのかなと思いました。

〇最後に

今回派遣してくださった県高野連・北信高野連の先生方に感謝いたします。また、練習見学をさせていただいた星陵高校、研修を引率してくださった山岡先生、上条先生に御礼申し上げます。さらに、ともに研修に参加し、よき研修としていただいた中村先生、山﨑先生、竹田先生たちとの出会いにも感謝いたします。

冒頭でもありましたが、甲子園に憧れて現在があります。研修を通じてもその気持ちは変わらず、一緒にやっている子どもたちの輝く姿を見たいと強く思いました。

令和元年度甲子園研修　報告

松本第一高等学校
山崎　裕也

８月９日（金）～１１日（日）の期間甲子園での研修に参加させていただいて、今まで見たことがない、甲子園の裏側や実際の試合の入り方、終ったあとの行動などを知ることができ、やはり甲子園はとてつもない大きな舞台であることを思い知らされました。

観戦試合

８月９日（金）（大会４日目）
第二試合　仙台育英高校２０－１　飯山高校
第三試合　習志野高校　　５－４　沖縄尚学高校
８月１０（土）（大会５日目）
練習視察　星稜高校
第三試合　岡山学芸館高校６－５　広島商業高校
８月１１日（日）（大会６日目）
第一試合　作新学院高校　５－３　筑陽学園高校
第二試合　東海大相模高校６－１　近江高校

この３日間での研修の報告をさせていただきます。

１．甲子園到着

甲子園に到着後そのまま、室内練習場へ試合に向けての準備を開始する。この試合前の時間は、リラックスできる時間にすること。リラックスできる環境として、原則室内練習場への出入りをさせない。その高校の高野連の関係者であっても２～３分で激励などをした後に退出するほど、とにかくリラックスして試合への準備ができる。さらに、室内練習場にはウォーターサーバーやスポーツドリンクが用意されており自由に飲むことができる。夏の大舞台へ向けての万全準備を室内練習場にて行い試合へと臨む。

やはり、甲子園という大観衆のベストのプレーをする為にはこのアップを含め甲子園に到着してからの精神的なコントロールをするのがとても重要であることが強く感じた。

２．試合前

前の試合が終わると３０分でシートノックを終え試合が始まる。前の試合で勝利校の校歌が終わった瞬間にオーロラビジョン（電光掲示板）は、その試合の余韻に浸ることなく瞬時に次試合の文字に変わる。それにより、選手の緊張感は一気に高まり試

合に入っていくと感じた。この短時間で試合ができる状態を作るには、室内練習場でアップ、キャッチボール（塁間程度）が終えているとはいえ、外野でのキャッチボールもなく後攻チームであれば荷物を運び下したらすぐにシートノックが始まる。まだベンチ前には前の試合で負けたチームがいたり、記者の人も何十人いたりする状態で始まる。長野県大会のように応援席からの応援もなく、場内にはアナウンスやテーマソングが流れていたり、スタンドは前の試合との入れ替わりで騒がしい状態の中、いかに平常心でプレーできるか。

両チームのシートノックが終わりここでグラウンド整備が入り、選手からするとここでやっと気持ちを落ち着かせる時間が多少できる。ここまでは、やはり甲子園というスピーディーに行動することが必要かつ短時間で試合への準備を行いだいぶ精神的に苦しいと感じる時間だったと思うが、この整備の時間にもう一度気持ちを作り直して試合に入っていかないと、試合を作ることが難しくなるのではないかと感じた。

３．試合中

試合中に感じたことは、大観衆の中でだれだけ平常心で臨めるかである。「甲子園には魔物がいる」という言葉をよく聞く。やはり、甲子園には良くも悪くも魔物がいると感じた。それは、観客である。どっちの学校であっても一球一球に大きな反応がある。それは、バントであってもどよめき歓声があがる。打ってもどよめき歓声があがり、守備で素晴らしいプレーが出れば歓声があがりと、プレーしている選手は平常心を保つことは難しいと感じる。

今回も、習志野高校と沖縄尚学高校を観戦した時にそれを感じた。９回表習志野高校３対４で負けている攻撃。一死からヒットで出塁し盗塁を決め一死二塁。ここで、美爆音と呼ばれている習志野高校吹奏楽部の演奏に合わせて球場全体が手拍子の音でいっぱいになった。ここでタイムリーが出て同点、さらに二死二三塁逆転場面であったがここではセカンドゴロに打ち取ったが、球場全体が一体となって雰囲気が作られていた。

逆に、あの大歓声があるからこそ素晴らしいプレーも生まれると感じた。今までに公式戦で本塁打を打ったことのない選手が打つことができたり、投手では自己最速のボールを投げたりと、今まで以上の力を発揮できるのも甲子園だと感じた。

４．試合後

試合後、道具の片付け、砂を持ち帰るなどの行動もやはり素早い。勝ったチームか

ら引き上げる。そのまま、監督、指名選手のインタービューが始まる。このインタービューは２３分と時間が厳格に決まっている。高野連と記者とが話し合った時間であり、高校生であるなどということで長時間にならないようにという配慮がある。さらに、負けたチームであっても２０分間の理学療法士からのストレッチなどの時間をとり試合後のケアを行っている。試合後約１時間で甲子園をあとにする。

５．プレー

試合中のプレーを見て感じたこと、まずはもちろんスイングの速さや、打球の飛距離はやはり素晴らしくレベルが高いと感じた。それ以上に、三遊間や一二塁間をゴロで抜けていく打球の多いと感じた。投手のレベルが高いこともあると思うが、コンパクトに厳しいコースのボールにもくらいついて結果ヒットになっていると感じた。

積極的な走塁も素晴らしい。一瞬の判断の正確性が良く、常に先の塁を狙っている。東海大相模高校の攻撃の時に、バントが捕手後方のファールフライをスライディングキャッチした際、一塁走者はタッチアップをして二塁。バントを失敗しても周りがカバーして全員で仲間を助け合う。シングルヒットをツーベースにする。外野のスタートが遅れや、一瞬の隙を見つけて先の塁へ進塁する。相手に隙を与えない、甲子園にやってくるチームであっても、ちょっとした隙を見つけ攻撃していくことによって得点へとつながっている。

６．施設、設備

ベンチには、クーラーや今年からミスト付ファンを設置して暑さ対策を取っている。また、室内練習場、ベンチにはウォーターサーバー、スポーツドリンク（高野連が試行錯誤したオリジナル）を設置して熱中症対策を取っている。試合後のダウンなど、選手への配慮をしっかりと行っていることを感じた。

７．最後に

甲子園大会を運営している高野連役員の皆様の選手への気遣いや配慮、さらに観戦に来ている全員への対応など、今まで知らなかったことを知ることができました。やはり、大会がきることは全ての人への感謝の気持ちを忘れてはいけないと感じました。もっと細かいことにもしっかり意識をもって野球に向き合っていかなければ甲子園にはたどり着けないほど、甲子園は特別な場所であると感じた。

この貴重な経験さていただき、今後の指導に活かしていきたいと思います。また、このような機会を作っていただいた、長野県高野連、日本高野連の関係者、引率していただいた、山岡先生、上條先生、一緒に研修を行った、宮嵜先生、中村先生、武田先生に感謝いたします。ありがとうございました。

2019 年度甲子園指導者研修報告書

諏訪二葉高等学校
武田 圭弘

【初めに】

今回、甲子園研修に参加する機会をいただき、8 月 9 日～11 日の 3 日間、第 101 回全国高等学校野球選手権大会を見学させていただいた。今回の研修では、以下の試合や出場校の練習を観戦させて頂いた。

〇大会 4 日目

第 2 試合：飯山 ― 仙台育英 / 第 3 試合：習志野 ― 沖縄尚学

〇大会 5 日目

星陵高校の練習見学 / 第 3 試合：岡山学芸館 ― 広島商業

〇大会 6 日目

第 1 試合：筑陽学園 － 作新学院 / 第 2 試合：東海大相模 － 近江

以上の試合や練習を観戦から、テーマに絞ってレポートさせていただく。

【飯山高校の試合から】

研修初日、飯山高校の試合を観戦した。県大会では相手校を抑え込んでいた投手陣が、仙台育英打線につかまり、次々と点数を重ねられる姿を目の当たりにし、全国レベルの打線の破壊力のすさまじさを感じた。決して飯山高校の投手陣が悪かった訳ではなく、ものの見事に外野の間を抜いていく。衝撃を受けた。

その一方で、目立ったのが、飯山高校のアルプススタンドの声援である。白一色に染まり、ワンプレーごと大歓声が沸き起こる。後に聞いた話によると、バス 70 台の大応援団だそうである。全国でも有名な習志野高校の吹奏楽の応援も統率がとれていてすごかったが、それとは違った、暖かみのあるアルプスの応援に心を打たれた。

そこから感じたのは、高校野球というスポーツが地域に活力をもたらすということである。飯山高校の甲子園出場が決まると、飯山市、近隣の中野市、山ノ内町などでは喜びに包まれ、地域として飯山高校を応援する雰囲気になっていた。その背景には飯山高校野球部が地域に密着した野球部であったことが挙げられるだろう。高校野球を指導していくに当たって、地域密着型の野球部を目指すことで、地域への貢献になるとともに、地域から応援されることが選手のモチベーションにもなり、精神面や技術面の向上にもつながっていくのではないかと考える。そのためには、普段から挨拶や清掃活動、地域との交流をする機会を設けるなどの工夫が必要になる。現時点ではその程度の考えであるが、これから指導に当たっていく上で、様々な取り組みを考えていければと思う。

【甲子園出場校の投手、打者、走塁、戦術】

〇投手

近年、投球数制限が話題になる中で、投手を複数要する高校が増え、1試合の中で投手の継投をするチームや、試合後と投手を代えていく高校が多く見られるようになった。県大会を制した飯山高校、準優勝の伊那弥生ヶ丘高校はその典型であった。甲子園で数試合観戦して、やはりどのチームも複数の投手で継投する姿が見られ、全国大会でもそうなのだと実感した。県大会を勝ち抜き、甲子園でも躍動するためには、複数の投手を要することが大事な要素である。公立校でも実践できるように練習試合での起用や練習で工夫をしていく必要性を感じた。

〇打撃

どのチームも、しっかりバットを振り抜き、軽々と外野手の後方へ運んでいるイメージで、当てにいく打撃は少なかった。ダウンスイングが見直され、レベルスイング（アッパー気味）が理想とよく聞くが、甲子園を観戦しての印象は、ボールに対してバットを上から入れ、乗せて運んでいくイメージの打者が多いのではないかと感じた。研修2日目の午前には、星陵高校の練習を見学させていただいたが、星陵高校の選手の打撃も同様のイメージでスイングをしている印象を受けた。どの選手も打球がよく飛び、柵越えを連発していた。スイングの強さはもちろんであるが、スイング軌道も今後の参考になった。

〇走塁

先述の打撃力と関連して、外野手の後方まで打球を飛ばす打者が多いため、外野手はかなり深い守備位置をとることが多い。よって、打者走者は常に、シングルヒットでも2塁を伺う姿勢を見せ、ファンブルしたら迷い無く2塁まで進んでいた。甲子園に出るような強打者が揃うチームでさえも打順関係なく次の塁を狙う姿勢を常に見せていたことは大いに参考になった。

さらに印象深かったのが、0アウト1塁、または1アウト1塁からの盗塁である。野球というスポーツは、アウトを重ねながら1つずつ塁を進めると点は取れない仕組みになっているため、点を取るにはアウトにならずに走者を進めることが必要になる。甲子園出場校は、盗塁を有効に使っていた。ヒットエンドランを多く使いチャンスを広げる作戦もあるが、緊迫した場面での盗塁は相手チームに大きなダメージを与えることができる。走力の問題もあるため、チーム全員が盗塁をすることは難しいが、盗塁ができる選手を増やすような工夫が必要であると実感した。

〇戦術

先述の盗塁以外では、沖縄尚学高校の緻密な攻撃に心を打たれた。ランナーを3塁に置き、様々なカウントからスクイズやセーフティースクイズを決めていた。甲子園という特別な場所で軽々と決めるには、相当な練習と精神力が必要となる。普段の練習や練習試合から、試合を想定し取り組むとともに、選手たちが、「この場面ではスクイズあるな」という心持ちでプレーできているのだなと感心した。また、作新学院高校や東海大相模高校の攻撃では、ランナー2塁からのヒットエンドランが多く見られた。ランナーが2塁に進むと、サインを出し渋ることがあるが、効果的にヒットエンドランを使っていくことも必要と感じた。また、ランナーにも常に3盗を狙う姿勢が必要であるため、レベルが高い攻撃であり、普段から走塁への意識を高く持つことが大事である。

【甲子園の施設見学と試合前後の流れ】

研修２日目の第四試合の試合中の時間に、大変お忙しい中にも関わらず本部役員の先生方にベンチ裏やブルペン、ダッグアウト、クーリングダウン等の見学と説明をいただいた。

近年、熱中症への対策が急がれているが、甲子園でも各所に対策が施されており、ベンチ内には扇風機、ベンチ裏にも大きな扇風機が備えられていた。また、選手の体調管理の観点から試合後は専門家の指導の下､40 分間のクーリングダウンが行われる｡暑い甲子園で最高のパフォーマンスを発揮するために、多くの工夫がされていることが分かった。

試合前には取材があり、その後、ブルペンでアップを行うが、広いスペースではなく、ダッシュやキャッチボールを十分には行えない状況であった。そのようなイレギュラーな状態でも以下に自分の実力を発揮できるかが甲子園で必要な能力ではないかと思った。さらに、前の試合が終了し、グラウンドに入った後は、天然芝部分でのキャッチボールはできず、ファールゾーンの人工芝部分でのみキャッチボールが許され、すぐにシートノックが始まることにも驚いた。短い時間、少ない球数でいかに早く肩をつくり、さらには気持ちもつくっていかなければならない。日常からスピーディーな行動に慣れておかなければ十分に力を発揮できないのではないかと感じた。

【その他】

目を引いたのが、阪神園芸さんによるグラウンド整備である｡試合中や試合後の整備の姿をみて､グラウンド整備の大切さを改めて実感した。迅速かつ丁寧にグラウンドをならす姿、ラインカーでまっすぐな白線を引く姿、雨を降らすように放水をする姿、全試合終了後、荒れたグラウンドを元通りにする姿に心を打たれた。グラウンド整備の上手さがプレーに比例するとは言えないが､整備に取り組む姿勢は､野球に取り組む姿勢と比例するのではないかと考えさせられた。今回の阪神園芸さんの姿は、日頃の整備に対する姿勢を見直すきっかけとなるものであった。

【最後に】

今回の研修に際しまして､大変お忙しい中にも関わらず､ベンチ裏等を案内していただいた本部役員の先生方、3 日間引率として同行し様々なお話をいただきました山岡先生、上條先生、このような貴重な機会をいただきました南信地区の先生方、そして長野県の高校野球関係者の皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

令和元年度甲子園指導者研修報告書

蓼科高等学校　中村　博之

１、はじめに

8 月 9 日～11 日までの 3 日間、甲子園指導者研修に参加をさせて頂きました。私自身夏の甲子園は高校以来 15 年振りであり、選手から指導者に立場が代わり当時と違った視点、気持ちで観戦をさせて頂きました。また、指導者と言う立場だけではなく今後大会を運営する立場としても非常に役に立つ経験が出来たと感じています。その中でも特に印象に残ったことを報告させて頂きます。

観戦させて頂いた試合は以下の通りです。

大会 4 日目（研修 1 日目）

第 2 試合　飯山高校（長野）－ 仙台育英（宮城）

第 3 試合　習志野（千葉）－ 沖縄尚学（沖縄）

第 4 試合　高松商業（香川）－ 鶴岡東（山形）

大会 5 日目（研修 2 日目）

第 3 試合　岡山学芸館（岡山）－ 広島商業（広島）

大会 6 日目（研修 3 日目）

第 1 試合　筑陽学園（福岡）－ 作新学園（栃木）

第 2 試合　東海大相模（神奈川）－ 近江（滋賀）

１、 試合観戦を通して

研修期間中に本年度長野県代表となった飯山高校対仙台育英戦を始めに観戦した。初出場という事もあり、飯山高校のカラーである白を基調とした帽子でアルプススタンドは埋め尽くされ、球場全体も飯山高校を応援する雰囲気を強く感じ、長野県代表が甲子園常連校を相手にどこまで通用するか非常に興味を抱いていた。結果は 20 対 1 と敗戦を期した訳だが、先制点をとり、最後まで諦めず戦う選手たちの姿は F の精神を強く印象付けるものであり、地域の方々に夢と勇気を与え、高校野球の素晴らしさを感じる試合だった。

甲子園では連日 4 万人以上が観戦する。選手たちの一球一打に歓声やため息が聞こえ、流れが両チームを往き来する。それを象徴するのが筑陽学園対作新学院戦ではないだろうか。9 回裏に筑陽学園が 2 点を返し同点となり筑陽学園に流れが傾き掛け球場全体も筑陽学園を応援する雰囲気の中、作新学院の先頭打者がヒットで出塁、すかさず 2 盗、3 盗を決めたことで筑陽学園に傾きかけた流れを引き戻し勝利した。

甲子園の大舞台でプレーをすることは、想像できない程の緊張感とプレッシャーがのしかかる。普段の試合、練習から 1 点の重み、1 つのプレーの大切さを意識づけ、緊張感やプレッシャーのかかる中でも、自分の力を常に出し切れるよう指導することができているかが甲子園での勝敗を分けるのではないかと感じた。

２、選手の能力

「投手」

地方大会を勝ち抜いてきた投手はスピード、ストレートや変化球のキレなど全てにおいてレベルが高かった。好投手がいる中で、個人的に注目していたのが、近江高校の林くんと習志野高校の山内くんである。両投手ともストレートや変化球のキレは素晴らしいのだが、ストレートは 130km 後半、球種も多いわけではない。そんな中でも打者を打ち取ることができるのは、テンポの良さと配球、それとコントロールを意識したピッチングがあってこそではないだろうか。テンポ良く投球することで打者のリズムをずらし、打者に考える暇を与えない。逆に打者のタイミングが合ってきたら時間をかけながら配球をし、球種を絞らせないなど自分の能力を最大限に活かすにはどうすれば良いのか考えてプレーしているように見えた。

選手たちはどうしてもスピードや球種、変化球の曲がりの大きさなど、数値や表面的に見えるものを求めがちだが、2 年半の期間で、そういった所を大幅に伸ばすことは難しい。現状の自分の能力でどう抑えるか、考えさせながら指導することの重要さを改めて認識することができた。

「打者」

各チーム情報収集をし、狙い球を絞っているからこそできることなのだろうが、体勢を崩されることなく、しっかりとバットを振り切っている印象を受けた。また、初球ストライクから打ちに行かず、追い込まれるまで狙い球を待っている打者が多かった。それも 1 スイングでしっかりとボールを捉えられる技術があってこそだと思うが、それを可能にしているのは、しっかりとした体づくりがあってからではないだろうか。どのチームの選手もしっかりとした下半身で、たとえタイミングがずれても下半身の粘りでしぶとく外野の前に落としたり、ファールで逃れたり、簡単には打ち取られてはいなかった。真夏の炎天下でプレーすることを考えれば、崩しながらのヒットやファールで球数を増やされるプレーは身体的にも精神的にもスタミナを消費することになる。勝つためにはそういったプレーも今後必要になってくるのではないかと感じた。

「守備」

ファインプレーなどの好守備も数多く見られたが、どのチームもフィールディングや送球は正確で、打ち取った打球を確実にアウトにしている印象を受けた。また、投内連携や中継プレーなどフォーメーションの動きにミスが無く、無駄な進塁や得点を与えないよう徹底的に指導をしているように感じた。

内野手のフィールディングはシングルハンドで捕球をする選手が多いように思う。捕球の仕方は指導者のタイプにもよると思うのだが、1 日 4 試合の過密日程の中試合をするので、イレギュラーでのエラーや得点のシーンも多く見られた。両手かシングルハンドかどちらの捕球が良いとは一概には言えないが、試合が重なるにつれグラウンド状況は悪くなるので、そのことも考えて指導していくことも大切だと感じた。

「走塁」

今回観戦をさせて頂いて、走塁で 1 番印象に残っているチームは東海大相模である。好投手の林くんをなかなか攻略できず、6 安打に抑えられながらも 6 得点。相手のエラーなどもあり運も味方につけながらの得点ではあるが、相手のミスや隙を見逃さず次の塁を積極的に狙いチャンスを広げる走塁は、打線以上に守備陣に与えるプレッシャーが大きかったのではないかと思う。また、飯山対仙台育英戦でも外野手からの返球が外れたり高かったりすれば、すかさず 2 塁を狙いに行く走塁が多々見られ、少ないチャンスを確実にものにしようとする意識と質の高い走塁は今後指導をしていく上でとても参考になった。

３、大会運営

研修では普段見ることのできない球場施設を、大会本部で運営に携わっている小林善一先生方に案内をして頂いた。球場入りの時間は決められており、到着後は室内練習場でウォーミングアップを行う。普段はプロ野球の阪神タイガースのホームグラウンドとして使用しているため、1 塁側の室内練習場の方が広く設計されており、その時点で 3 塁側の方がハンディを抱えることになるとのお話だった。広さはウォーミングアップとキャッチボールができるぐらいの大きさのため、最大限のパフォーマンスをするためには、普段から限られた場所で試合への準備を心がけることが必要だと感じた。

室内練習場に入ってから試合終了までチーム関係者以外選手たちとは会うことはできず、真夏の炎天下の中プレーする選手のことを考えミネラルウォーターなども常備しているとのことであった。一日 4 試合の過密日程のため試合間隔は約 30 分と短く、キャッチボールは人工芝で 5 分のみ、また、グラウンド整備も走路しか行わないため、普段とは全く違った準備の仕方、そして、グラウンド状況で試合に臨まなくてはならず、試合への入り方は非常に難しいように感じた。

試合中はベンチにミストがでる冷風機やオーニングで日除けをしたり、スポーツドリンクやミネラルウォーターを用意したり熱中症への対策がなされていた。また、試合終了後は専属の理学療法士によるクーリングダウンが行われ選手へのケアも大切にした大会運営がなされていた。

４、まとめ

今回の甲子園研修を通して、甲子園へのすばらしさを感じ、「ぜひあの素晴らしい舞台で選手たちをプレーさせてあげたい」そんな気持ちに改めてなりました。選手たちの成長ため今後の指導にあたるとともに、長野県高校野球の発展のために刺激と変化を求めて日々勉強していきたいと思います。

最後にこのような研修の機会を与えて頂いた長野県高校野球連盟の方々をはじめ、研修期間中ご指導頂いた山岡先生、上條先生、同研修に参加された 3 名の先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。